



ピアノ教育の本質を考える

特別企画 福田靖子/藤井一興 対談

鍵盤楽器も時代ニーズに合わせて、手軽に楽しめるようになった。しかし、人口の一極集中が進み、住宅の密集、集合住宅の急増など、住環境も大きく変化するにつれ、「ピアノ」が騒音問題の1つとして取り上げられるようになった。その影響もあって電子ピアノでピアノの練習をする子どもも増えている。また、子どもの減少や、習い事の多様化、受験教育の加熱などで教育の現場は変貌している。ピアノ教育の本質が見失われているように感じられるのは、このような現状によるところなのか……。そこで、ピアノ教育の現状について、またピアノ教育の本質はどうあるべきなのかを、ピアノ指導者を代表して社団法人全日本ピアノ指導者協会(以降ピティナとのみ記す)専務理事福田靖子先生と、世界的なピアニストとして、また、作曲家としてもご活躍の藤井一興先生をお招きして「ピアノ教育の本質を考える」というテーマで去る4月15日ヤマハ銀座店に於いてご対談いただいた。

環境の変化によって増える 電子ピアノでの練習と 本来のピアノ教育との違いは。

■ ここ数年、集合住宅での騒音問題、また、ピアノレッスン生の減少など、ピアノを取り巻く環境が厳しくなったと思われます。このような環境の変化が、実際のピアノレッスンにどんな影響を及ぼしているのでしょうか。

福田 今ね、ピアノを教えている、いわゆるレスナーと呼ばれる先生方に

は、生徒がスイミングスクールや塾に多くの時間を使ってしまっていて、ピアノの練習をしてこない。こんな悩みがものすごくある。

また、つい最近、私の息子がマンションを探したら、契約書にピアノを入れてはいけないという一項目があるんですね。これが一般的な話だとすれば、集合住宅では、アコースティックピアノの練習ができないことになるでしょう。住宅の面でも問題があるわけです。

藤井 外国では、ピアノを弾ける部屋

を探すのはもっと厳しいんです。パリもロンドンも…。日本もやっとな海外並になってきたんですね。外国の友人や知人など、夜の9時以降は電子ピアノを弾いている方が沢山いますよ。

福田 住宅の事情で、電子ピアノを持っている人が多くなったんだと思うんです。私が思いますにはね、本来のピアノレッスンからすると、問題なのは電子ピアノで練習している生徒だと思っただけですよ。集合住宅に住んで、あるいは経済的な理由で電子ピアノを使っているのはよくわかるんですが、

やはり、ピアノ必須の音色やタッチ感
は、アコースティックでしか教えられ
ないことでしょう。ピティナ・コンペ
ティションの審査員の1人が申すに
は、コンペティションの予選で、電子
ピアノで練習している生徒は、音色を
聴くだけでわかると言うんですね。こ
れでは上位はおろか予選さえも通らな
い。要するに「音色がきれいじゃな
い」と言うことなんです。

藤井 電子ピアノには電子ピアノの良
さがあると思うんですね。ボタン1つ
で演奏を録音できたり再生したり、
チェンバロとピアノの音を組み合せて
楽しむとかね。でも、電子ピアノだけ
で練習して、はずさないで弾けたとし
ても、実際のアコースティックピアノ
では、音が出てこないでしょう。

福田 そうですね。声楽に発声法があ
るように、ピアノには指先のコント
ロールで音色を創る"発声法"があると
私は常々申しています。電子ピアノで
はボタンの組み合わせによる音色とでも
言いましょうか、指先のコントロール
で創る音色は表現できないんですね。

私は電子ピアノの発売当初から、電
子ピアノの学習法とか、普及法を考え
て実践してきましたが、これからは、
アコースティックピアノの道と電子ピ
アノの道と、二又に別れていくと考え
ています。劇に例えると映画と舞台劇
と別れてきたように……。ちょうど
今、その分岐点にいるように感じてい
ます。どんなに電子技術が発達して
も、人が弾くピアノの音色は絶対に創
れないんですから。

藤井 ええ、その通りだと思います
よ。電子ピアノとアコースティックピ
アノは全く異質のものだから、コン
クールやコンテストの準備、音楽学校
に進むなどになったら、これはもう、
アコースティックピアノで練習しないと、
指がいかないんです。第1にメカ
ニックが違う。鍵盤の重さ、戻りなど
の鍵盤感覚を覚えないと、トゥリ
ラー、連打音、ハーフトッチのよう
な、微妙な打弦感覚は身につかないで
しょう。鍵盤教育の一環として、電子
楽器をお使いになるのは結構なこと

ですが、はじめにキッチリとアコース
ティックピアノで基礎をやってからで
しょう。

福田 ピアノを教えている先生方は、
電子ピアノの教育法とアコースティッ
クピアノの教育法は根本的に違うとい
うことを知っていただかないといけま
せん。電子ピアノを持っているからと
いって、安易にピアノレッスンをする
のではなく、まずは、アコースティッ
クのタッチ感と音色を指導しないと…
…。

アコースティックピアノ でなければ指導できない 子供の感性が表現される音色。

■ 集合住宅でピアノを思いきり弾け
ない理由として、昨年発表された建設
省発行「賃貸住宅標準契約書」の禁止
行為の中に「大音量でのピアノ演奏」
と記載されてあることもあるようで
す。

藤井 困った問題ですね。これでは、
賃貸住宅ではピアノ演奏ができない。
文化の向上という視点で考えると、逆
行しているみたいですね。

福田 そうなんです。冒頭でも申し
ましたが、私の息子が引越越するの
に苦労したのは、ピアノを持ち込むこ
と自体が禁止行為に発展しているん
です。文化の向上も考えて、内容を見直
していただかないと困りますよね。

■ ピアノの騒音が、社会的問題とし
て取りざたされている中で、消音機能
付きのアップライトピアノ「サイレン
トシリーズ」が、昨年ヤマハから発売
されました。このサイレントシリー
ズは、ピアノのレッスン環境に、どの
ような影響を与えるのでしょうか。更
に現状打開策になり得るのでしょうか。
藤井 これは1つの奇跡ですよ！ピアノ
の長い歴史から見ても、ピアノから全
く音が消えるなんて考えられなかった
ことです。

福田 私は、一目見た時「これだ！」
と思いました。家で練習できない生徒
の対策にいいでしょう。レッスンの前
に別の部屋で消音して練習させるとか
……。ピアノから音が消えるから、

レッスンしている部屋には音が漏れて
こない。別室の生徒もヘッドフォンを
使うから、余計な音が耳に入らない。
藤井 部屋が2つなくても、ヘッドフォ
ンをするから同じ部屋でも構わない。
指の練習には充分です、ぜひお使いに
なるといい。私が生徒を指導する時
は、生徒に必ず30分間指ならしをさせ
てからレッスンしますが、この指なら
しが、レッスンの効率も内容も充実さ
せます。消音機能付きピアノを私も欲
しいくらい。欲を言うと、グランドピ
アノの消音タイプを造っていただきた
い。



消音機能付きアップライトピアノを消音演奏
する藤井先生。

福田 しかも消音演奏でも、鍵盤タッ
チのニュアンスがアコースティックピ
アノのようなので、ピアノをレッスン
していく上で、大切なタッチ感の指導
もできる。レスナーの悩みだった家で
練習できない生徒には、2、3台お買い
になって練習させればいいでしょう。

藤井 弾いた感じ……。特にタッチが
とてもイイ。周りに遠慮しないで、併
で練習したい時は、消音して練習でき
ますね。ヘッドフォンから聴こえて
くるピアノ音も、ドルチェというか、
マイルドで耳疲れがしませんね。ペダ
ルもレスポンスがいい。サイレントを
持っている、夜中だろうが、明け方
だろうが自由に弾ける。音大生やプロ
だって、指の練習や譜読みなどは助か
りますよ。

福田 そうそう、夜中など、電子ピ
アノをお使いになっていた方にお薦めし
たいです。電子ピアノとは全然違う

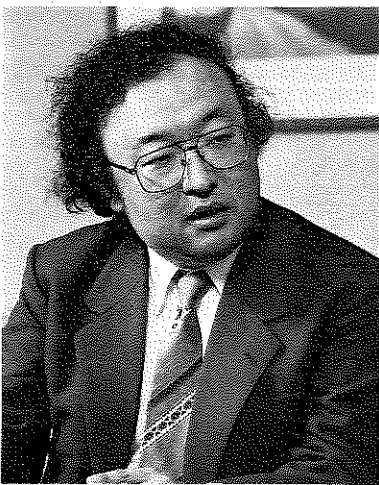
タッチ感ですから。

藤井 もう電子ピアノじゃ話にならない。それに、鍵盤のタッチ感を身につけるための基本的なことですが、アコースティックの鍵盤の上で練習しないと運動神経がうまく働きません。その点、消音機能付きピアノならキッチリとしたタッチが保証されている。

福田 ピアノを思いきり弾ける環境が狭められている中で、消音機能付きピアノをお使いになれば、周りに気を使わないで練習できますよね。

「ピアノが上手ね」と レッスン生が言われる その要素とは。

福田 ところで先生、「ピアノが上手ね」とレッスン生が言われる要素は何だと思いますか。



藤井一興・ふじいかずおき
ピアニスト/作曲家

東京芸大在学中、フランス政府公費留学生として留学。国立高等音楽院作曲科・ピアノ伴奏科を一等賞で卒業。またバリエコールノルマンピアノ科で高等演奏家資格第一位で卒業。その間、フランスの代表的作曲家に師事。1976年より数々の国際ピアノコンクール入賞。日本やヨーロッパのテレビで活躍、世界一流の指揮者、アーティストとの共演も多い。CDも19枚をリリースしている。87年村松賞、第3回リローバル音楽賞を受賞。現在、東邦音楽大学客員教授、東京芸術大学、桐朋学園大学講師。生徒のレッスンにピアノプレーヤを使うなど、古いレッスンスタイルにこだわらず、ピアノ文化の向上に前向きな姿勢で取り組んでいる。

藤井 ウーン……いろんな要素が重なり合うことなのですが、簡単に言うと、旋律、和音、リズムが柱で、フレーズの構成力、ペダリング……。でもね、生きた音楽でないと、その子が持っている感性を尊重しないとイケないと思います。先生が教えた通りに弾くのは無理なことですよ。子供が大人っぽく弾いても、すぐバレますから。

福田 その通りだと思いますよ。ピティナ・コンペティションの入賞者コンサートを聴いていても、本当にうまい子は、「先生に教えられた」というようなものじゃないですね。自分の中から出てきたものを弾いている。それが伝わるんですよ。

藤井 同じ会場で、同じくらいの年齢の子が、同じような曲を弾いても、1人ひとり全く違った音色で聴こえる。自分が持っている感性を、音色で表現しているんです。

福田 子供の感性が、音色となって表現されるのは良くわかるんですが、高校生ぐらいになったら、ちょっと演奏が変わってくると思うんですね。長年教えている生徒で、小学生のころはショパンの「エチュード」をすばらしく演奏していたんですが、高校生になったとたん指は回っているけど、聴いていてつまらない……。なぜこうなったか、不思議なんですけど……。

藤井 1つは、曲へのイメージが欠落してしまったんでしょう。子供のうちは周りに捕らわれないで、子供なりの言葉がピアノの演奏に出ていたんだと思います。もう1つは、体の成長期に起こることですが、指の腱が骨の成長について行けず、寄ったり、縮んだりする“結合症”が出ているのかもしれないね。本人は弾いているつもりでも、観客まで音が届かなくなる。音が出ていないから、当然、表現力も伝わらない。

福田 なるほど、結合症ですか。普段の練習で直す方法があるとは聞いているんですが……。

藤井 音型練習といって、ピアノの鍵盤で縮んだ腱を伸ばす練習方法があります。これも、アコースティックピア

ノの鍵盤タッチでないと、音型練習にはならない。自分の中から出てくる音色を、1つ1つ確かめながら、音型の練習をしないと表現力そのものが欠けてしまうんです。

福田 これは、ピアノを指導していく上で、重要な問題ですね。生徒の体の成長を見ながら、ピアノを指導していくというか……。

藤井 そうなんです。注意していただきたいのは、成長期に無理して指を鍵盤に押し込まないことです。指が伸びた、大きくなったと喜んでいても、腱の成長が追いついていきません。その人の手に合った、無理のない音色づくりをすることです。みんながみんな、リヒテルやリーベンシュタインのように成れるもんじゃない。だからこそ、日頃から音色を確かめながら練習をすることです。

ステージでの演奏を前提として 色彩感、造形美、想像力を 音色で表現できる指導法。

福田 ところで、ピティナのコンペティションで藤井先生の生徒さんが、いい成績で上位に入賞してきていますが、何に気をつけてご指導されているんですか。

藤井 いえいえ、福田先生の主催なさっているコンペティションでは、いいホールで弾かせていただいて本当に感謝してるんですよ。ピアノを弾く上で一番大切なものは、やはりステージでの感覚ですから。どの先生も、それを目的としてご指導されていると思います。ステージの感覚を前提として、色彩感、造形美、イメージネーションを音色で表現できるようにということですね。

福田 なるほど……。それでは、先生が音色のご指導をなさる時の、具体的なレッスン方法をちょっとお聞かせいただけませんか。

藤井 今、小学校3年生の女の子なんですけど、1年生の時からハノンの全調を、12通りの音色で弾かせてます。ソステヌート、レガート、レガティシモ、スタッカート……軽やかに、空気

のように、悲しくあるいは蝶々のように……。また、今日はハ調で力強く、次のハ調は蜂蜜のように甘くやってみましょう……など。その子はすばらしい音色と表現力を持っていて、私も学ぶことが実に多い。大人にない感性、大人が表現できない美しい音色が出せるんですよ。

福田 そういふご指導は、やはりアコースティックピアノだからこそできる指導ですよ。

藤井 それはもう大前提でアコースティックですよ。音色は自分の声と同じように創るものなんです。どんなに科学が発達しようと、電気的に人間の生身の声は創れないでしょう。

福田 そうです。アコースティックピアノの“音色”とは、弾く人の感性から出てきた音のことなんです。

藤井 そうです。音色を指導するということは、声楽で例えると、最初を持って生まれた声を引き出してあげる。そして変声期には生徒の成長に合わせて工夫しなければならぬ。これはピアノのレッスンでもまったく同じことです。ピアノはデリケートな代弁者ですから。

福田 先生方も生徒にピアノをご指導しながら、自分たちも学んでいかなければならぬ。このことは一番大事だと私は痛切に感じます。



消音機能付きアップライトピアノをアコースティックで弾いて福田先生と会話する藤井先生。

ピアノ本来の指導を取り戻し 新しい音楽文化の指導を。

藤井 音色を身につける、あるいは演奏表現力を豊かにするということは、生の人間が、曲のイマジネーションを自分の言葉で、自分の手で、指で、筋肉で、腱で生ピアノに触れたそのままの音によって表現することです。それが、その人の個性となるのが本流なのです。ピアノは芸術なんですから。

福田 そうです。芸術は指先で音を確かめながら自分で創るものです。

藤井 「音色」と一言にいても、それは弾く人、1人ひとり違う“永遠のなぞ”と言っているくらいに……。

福田 それが芸術ですよ。それは、アコースティックピアノだから創れるもので、永久に消えることのない世界なんです。

藤井 それはもう、30世紀になろうと変わることはないです。ピアノは永遠のものだから、人間はこれに挑戦せざるを得ない。あと数年で21世紀。新時代の幕開けにふさわしく登場した消音機能付きピアノは、ピアノの革命ですよ。これからのピアノ教育、文化に多大な影響を与えたいと思います。

福田 ピアノを教えている先生方も、新しいものを何もかも拒絶せずに、レッスンに役立つ事にはど

んどん挑戦していただきたい。昔のスタイルを継承する事も大切だけれど、時代に取り残されない柔軟な頭で取り組んでいただきたいと思います。

藤井 ピアノレッスンを、単に高級化するのではなく、ピアノ教育を普及させるためにも、チャレンジしていただきたい。

福田 ピアノを取り巻く環境が著しく変化していく中、消音機能付きピアノの登場は、電子ピアノの普及で薄れてしまったピアノ教育の本質を改めて認識させてくれたように思います。ピアノ教育の本質は何か。ピアノを指導している先生は、もう一度基本に帰って、生徒の感性を引き出す指導方法を思い出していただきたい。また、ピアノ演奏そのものを芸術まで高めるために、新たなものに挑戦し続けてもらいたいと強く願います。



福田 靖子・ふくだやすこ

(社)全日本ピアノ指導者協会専務理事

東京芸大音楽科・専攻科(現・大学院)修了。ピアノ指導者として活動を始め現協会の前身である「東京音楽研究会」を創立。1976年より、全国組織で開催するピティナピアノコンペティションを開催。85年社団法人化、会員4000人の社団法人全日本ピアノ指導者協会となる。現在コンペティション参加者は2万人にもなった。また、中学校向けの歌曲集「うたのいずみ」を発刊。800万部というベストセラーになる。現在、社団法人日本家庭生活問題研究協会の理事も兼ねるかたわら、権威に屈することなく、正しいこと、教育的に必要なことを推進し続けている。